

# 月と太陽へのオマージュ ～路地・裏窓 そして光さす千秋ブロードウェイ～

～秋田駅前金座街の賑わいと秋田県が世界に誇る舞踏家・土方巽へのオマージュ～

## ■設計主旨 ・背景 目的

### ～金座街～

「ヤミ市」あるいは「闇市」と呼ばれる商業態は1945年ころから1947年ころにかけて全国各所に生じた自由マーケット、青空市場をさしている。終戦後は、様々な物資が集約され、駅前、広場、人々が集まる場所ならどこでも市場が開かれた。やがて、空地に柱をたて、屋根をかけ、店舗となっていた。秋田駅前でも金座街と呼ばれる、道の周りに無数の商店が立ち並び人々で賑わった場所があった。取材をすると、休日は1日をそこで食事をしたり、お土産を買ったりと楽しんだ思い出を懐かしむ声も多く聞かれた。

### ～世界からリスペクトされる秋田出身舞踏家・土方巽～

西洋の舞踏は「光」（太陽）、自分の舞踏は「影」（月）  
土方巽は1928年、秋田市に生まれた。彼の舞踏は「暗黒舞踏」とよばれ、一般の人々にはあまり知られていなかったが、世界の舞踏家の間では高く評価され、彼の弟子たちは今も著名な表現者として多く活躍している。彼は、西洋の舞踏は「光」（太陽）、自分の舞踏は「影」（月）と表現した。そして舞踏とは「命がけで突っ立つ死体」とも言った。ここ最近では彼の記念して毎年、千秋公園でステージが催され、世界中から様々な分野のダンサーが集い、踊り、そして交流をしている。今回の計画では、かつての金座街をイメージする路地・裏窓による繋がりと、計画のすべてが市民で作り上げる「劇場」となることをテーマに、かつて賑わった金座街と土方巽に光をあて、再生・オマージュとした。

## ■平面計画

### 仲小路・広小路・中央通り

### ～通過と滞留の曖昧さ～

### 大きなスロープ・屋外ステージ・ベルト

3本の通りをまたぐように大きな円（サークル）を描き、そのなかに入りこんでいく要素と、その周りを取り囲む星たちのように配置された・店舗・オフィス・シェアハウス・町工房との共演により、この計画すべてが市民でつくりあげる「劇場」もしくは「演芸場」となるよう計画している。

季節・天候・時間によって色（照明）の変化する、多様性ある劇場である。

現在のアトリオンは、パイプオルガンホールと千秋美術館を新たに計画し、オフィスは店舗群の中へあえて分散させた。異業種同士が交流し、誰かと何かを共有すること、そこから次の何かを発生させていく力を期待している。

### 大きなスロープ

仲小路側から上ることができ、パイプオルガンホールと千秋ブロードウェイに2階で接続している。このスロープが、路上パフォーマンス、朝市、TV中継の場として人々に溶け込み、また屋外ステージの観客席にもなる。

### 屋外ステージ

土方の暗黒舞踏（アングラカルチャー）は決して整った舞台を期待しない。空が見え、外気にふれ、雑踏の音をBGMとして命がけで突っ立つ。千秋ブロードウェイはこの舞台の楽屋であり、また舞台衣装の店舗、工房を併設している。

### ベルト

3本の通りを結ぶように大胆にこの敷地を横切り、そして舞踏の動きのように折れ曲がる線によってできた空間には土方巽の記念館と、通り抜ける道、情報ギャラリーを設け、また、このベルト自体もステージであり、仲小路の上部を渡る部分は屋外ステージの観覧場所としても楽しめる。

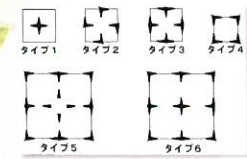
この計画のほぼすべてから、これらを見ることができ、「見上げたり」「見下ろしたり」複雑に視線が絡み合ういくつもの場所から「次の物語」が生まれる。様々な「路」でおこる事象が同時成立し、通過と滞留の曖昧さでこの場をつくり上げる。ここを通過する人々も、ここに集まってくる人々もすべてが「キャスト」である。

敷地は仲小路、広小路、中央通りの3本の通りに挟まれた、秋田駅ポポロードから真っ直ぐの「なかいち」に繋がる手前に位置している。ここは虫食い状に駐車場が広がり、かつての写真などから伺える活気に満ちた姿はない。この忘却寸前だった空間に再び人々を集めたい。

### 路地・裏窓 空中ストリート

### 街とエリアの活性化・コミュニティ

かつての金座街に存在したおびただしい小売店、計画されすぎていない小道がもし出す雰囲気再生しようとした。路地に明かりがとるように、窓と窓で繋がるように、この角の先には何があるのか、街角にドラマを感じられるように、柱のパターンに工夫をし、また路地を空中に持ち上げた。立体に交差する路地から「見上げたり」「見下ろしたり」複雑に視線が絡み合い人々をつなぐ。忘却寸前だった空間に人々を集め、偶然の出会い、予期せぬ出会いが物語りを生む。



### シェアハウスと町工房

今回の計画の中に、シェアハウスと町工房もある。これは県外からの移住者の受け入れの窓口となるよう、またこの場所の多様な魅力の向上のため、さらには、伝統的工芸品の店舗だけでは伝わらない魅力を作り手と客が一体となって実感できるようにした。プライベート空間とシェア空間の曖昧さにより、「誰かと何かを共有すること」「許容しあうこと」の関係を強化した。地域住民にも開かれた空間を設け、この場所の歴史をもう一度刻みたい。

### すべてが「キャスト」

店舗群は劇場を取り囲む屋台のように、大きなスロープ・屋外ステージ・ベルトはステージであり、客席であり、「路」である。そしてここに集まってくる人々すべてが「キャスト」である。

